

《第483回（2021年6月10日）子どもの本の読書会記録》 参加者：6人

時間：10:00～11:30 場所：オーテピア4階集会室

『ダーウィンの「種の起源」 はじめての進化論』 サビーナ・ラデヴァ／作・絵，福岡 伸一／訳 岩波書店

チャールズ・ダーウィンは、1800年代のイギリスの学者です。1859年に出版した著書『種の起源』で、「なぜ地球上には、多様な生命が満ちあふれているのか」という疑問に対して一つの答えを出しました。それが、ダーウィンの「進化論」です。

本書では、この『種の起源』をベースにし、ダーウィンがどのように「進化論」を思いついたのかというプロセスや、「進化論」のエッセンスが、美しいイラストとともに丁寧に紹介されています。文章はこどもにも分かりやすく書かれており、生き物や科学について、様々な興味を引き起こさせるような工夫も随所に見られます。読んで楽しい、眺めて楽しい、読者と誠実に向き合ってくれる科学絵本です。

次に、読書会に参加された方の感想を紹介します。

●ダーウィンの『種の起源』は、自分には難しそうで、興味がなかった。読書会に参加していなければ、一生読むことがなかった本だと思う。作者はグラフィックデザイナーなだけあり、絵がきれいで、引き込まれる。もっと深く知りたくなるような項目もあり、科学の取っ掛かりになるような本だった。巻末でおすすめされていた本も読んでみたが、見ているだけで冒険している気持ちになれた。ダーウィンの生き方にも興味がわいた。

●まず表紙を見て、「きれいだな、読みやすそう、開けてみよう」という気持ちになれる本。絵が写実的になりすぎず、内容も詰め込まれすぎているので、最後まで読みやすい。真面目な中に、随所にユーモアが散りばめられていて、くすっと笑える。たくさん例を挙げてくれているところも良かった。サメとイルカの先祖が違うというのは興味深い。ダーウィンと同じ時期の学者の話や、ダーウィンの「進化論」以前に説を提唱してきた学者の話などもあり、色々な興味の持ち方ができる。

●訳者の福岡氏の本を読みたいと思っていた。なぜなら、好きな作家の川上未映子氏が、福岡氏と対談していたことがあったから。ダーウィンの『種の起源』は、歴史で習ったことはあっても、手に取って読んだことはなかった。しかしこの本は、自分の視野を広げるためにちょうどいい本だった。はじめの方に描かれていた、ダーウィンのそばにいるヘビが気になる。嫌われもののヘビのイメージではなく、また別次元の違ったイメージに感じた。

●『種の起源』自体は、すごく読みにくい本。『種の起源』に行きつくための本はたくさん出ているので、そこから読み始めてもいいかなと思う。この本は、絵が楽しく、忠実に描いていないというのが逆に良かった。描かれている動物たちの表情も優しい。『種の起源』のエッセンスをきっちりと取り込んでいる良い本。読む人によって、どこに興味を持つかは違うだろう。小さい子が、絵だけ見ても楽しめると思うので、一家に一冊あってもいいと思う。

●こどもは、よく「なぜ？」と聞いてくるが、そういう感性がある子がこの本を読むといいと思う。著者は、科学とアートを結びつけるグラフィックデザイナーなので、内容がすっきりしていて、分かりやすい。生命がどのようにして誕生したかは自分自身もずっと疑問だったが、それはダーウィンにも分からないという。そういうところを、正直に、ちゃんと書いてくれている。読んで賢くなったし、安心してこどもに読んでもらえる本だと思った。

次回 7月8日（木）10:00～11:30 オーテピア4階集会室

□『カラスのいいぶん 人と生きることをえらんだ鳥』

嶋田 泰子／著，岡本 順／絵 童心社 申込み・参加費不要